

# 銭形平次捕物控

毒酒薬酒

野村胡堂

青空文庫



## 【第一回】

一

運座うんざの帰り、吾妻屋永左衛門は、お弓町の淋しい通りを本郷三丁目の自分の家へ急いで居りました。

八朔はつきくの宵から豪雨になつて亥刻よつ（十時）近い頃は漸く小止みになりましたが、店から届けてくれた呉紹ころうの雨合羽は内側に汗を搔いて着重りのするような鬱陶ふさふさしき――。

永左衛門は運座で三才に抜けた自分の句を反芻しながら、それでも緩々かんかんたる気持で足を運んで居りました。

眠ねそうな供の小僧を先に帰して、提灯ちようちんは自分で持ちましたが、傘と両方では何彼と勝手が悪く、少し濡れるのを覚悟の前で、傘だけは畳んで右手に持ち、五、六軒並んだ武家屋敷を数えるように、松平伊賀様屋敷の側へヒョイと曲つた時でした。

「え——ッ」

まさに紫電一閃です。いきなり横合から斬りかけた一刀、闇を劈いて肩口へ来るのを、  
「あッ」

吾妻屋永左衛門、僅かにかわして、右手に畳んで持った、傘で受けました。刃は竹の骨をバラバラに切つて、辛くも受留めましたが、二度、三度と重なつては、支えようはありません。

朔ついたち日の夜の闇は、雨を交えて漆よりも濃く、初太刀の襲撃に提灯を飛ばして、相手の人相もわかりません。

幸い、吾妻屋永左衛門、若い時分町道場に通つて、竹刀しなの振りよう位は心得て居ました。二太刀三太刀やり過したのは、そのお蔭というよりは、暗とぬかるみのせいだったかも知れませんが、兎も角も、雨合羽を少し裂かれただけで、大した怪我もなく、松平伊賀様前の、自身番の灯の見えるところまで辿り着いたのは、僥倖ぎようこうという外は無かったです。  
「えッ、面倒」

畳みかけて襲いかかる曲くせ者の刃やいばは、灯が見えると、一段と激しさを加えました。吾妻屋永左衛門、それを除けるのが精一杯、が、終ついに運命的な瞬間は近づきました。

後ろすさりの永左衛門、とうの昔に高足駄は脱ぎ捨てて居りましたが、道傍の石に足を

取られて、物の見事にぬかるみの中に引っくり返ったのです。

今ぞ観念と、振り冠った曲者の刃、

「あッ、大井、大井久我之助様」

自身番の灯が細雨を縫ってサツと、曲者の顔を照し出したのです。

それは弓町に住む浪人者で、同じ道に親しむ、青年武士——ツイ先刻まで、同じ俳<sup>はい</sup>蕨<sup>えん</sup>に膝を交えて、題詠を競った仲ではありませんか。

相手の素性がわかると、吾妻屋永左衛門妙に自信らしいものがついて来ました。日頃懇<sup>こ</sup>意<sup>い</sup>にしているだけに、大井久我之助の強さ弱さをことごとく知って居ります。

吾妻屋永左衛門の棒振り剣術と違つて、相手は二本差だけに、剣術の腕前は確かにすぐれて居るでしょう。しかし俳諧、弁舌、男前、わけても金の力では大井久我之助、鯪<sup>しやちほ</sup>銚<sup>すい</sup>立<sup>たち</sup>をしても吾妻屋永左衛門に及ぶ筈もなく、それを知り悉<sup>つく</sup>しているだけに、泥んこの中に引っくり返つた永左衛門、急に自信を取戻して来ました。

「暗討は卑怯だろう——何んの怨みで、この私を——」

永左衛門は建物の袖を木楯に、必死の声を絞りました。日頃金の力と男前と、弁舌と才気で、浪人大井久我之助を圧迫して来た町人吾妻屋永左衛門は、腕は少々鈍くとも、得物

が一本ありさえすれば、この男にムザ／＼敗ける気は無かったです。

「卑怯？ 卑怯は其方だ」

「何を」

「金の力に物を言わせて、拙者が言い交した女を横取りしたのは、其方では無いか」  
大井久我之助は、一刀を構えたまま、ジリジリと詰め寄るのでした。

「あ、その事か」

吾妻屋永左衛門、ハツと思ひ当ったのです。

相手は女故に禄も家も捨てて、我儘氣随に暮して居る浪人、暇はあるにしても、恥も人格も無い人間だけに、女出入の怨みを怨刃ねたばを合せた暗討の一と太刀に、人知れず片付けようという腹だったのです。

「覚えが無いとは言わさぬぞ」

「で、素手の町人を斬る気になったのか」

吾妻屋永左衛門は、相手の切っ尖を除けながら、隙があつたら、ツイ鼻の先の自身番に駆け込む気でした。

「望とあらば、拙者の小刀を貸そう——尋常に向つて来るか」

「いや、私は町人だ、武家との果し合いは御免蒙る」

「卑怯だろう」

「何方が卑怯か」

この掛け合いは、一瞬々々のやり取りで命を賭けての、必死の言葉争いでした。もし吾妻屋永左衛門に、少しばかりの心得がなく、大井久我之助に、人にすぐれた腕があつたら、こんな厄介な事件には発展せずお弓町の一角の、雨中の暗討で事が済んだことでしょう。

## 二

「親分、こんな馬鹿気た話があるんだが——」

と、ガラ八の八五郎が、明神下の平次のところへ、報告を持って来たのは、それから二、三日後のある朝でした。

「何が馬鹿気ているんだ、お前の持つて来る話で、馬鹿気ない話でえのは、あんまり無いようだが」

初秋の温い陽を除けて、平次は相変わらず植木の世話に余念も無かったです。

「だって親分、女一人のことから、大の男が命のやり取りを始めて——」

「待ちなよ、八、女出入で命のやり取りなんざ、お前が好きそうな話じゃないか」

平次は秋葉の緑の中に顔をあげました。

「それが生優しい命のやり取りじゃありませんよ、馬鹿々々しいの何んのもつて」

「詳しく話してみな、お前一人で呑込んでいたんじゃ、俺はちつとも馬鹿々々しくないよ」

平次は八五郎を誘い入れると、縁側に並んで掛けて、いつもの馬糞煙草にします。

「吉原の玉屋小三郎の店で、お職を張つて居た薄墨うすずみという大夫たゆうを親分御存じですかえ」

「知らないよ、俺のところにはそんな叔母ねえさんは無かつた筈だ」

「へッ、素気そっけ無い返事だね、いかに御静姐ねえさんがお勝手に聴いているにしても」

「つまらねえ気を廻しやがる」

「その薄墨が、どんな女だと思いません、親分」

「よつぽど変つて居るのか、眼が三つあるとか、何んとか」

「嫌になるなア、世間でそう言つて居ますよ、錢形の親分は大した人間だが、何んだつて

又あんなに野暮べらぼうだろう——つて」

「野暮べらぼうでも笹べらぼう棒でも構わねえが、その眼の三つある華魁おいらんはどうした」



「あ、まだ化物にこだわって居る——そんなイヤな代物じゃありませんよ、玉屋の薄墨華魁というのは、そりや大した女で」

「フ——ム」

「仲町をクワツと明るくしたほどの女だ、上品で愛嬌があつて、茶の湯生花歌へえけえ——諸芸に達して親孝行で」

「大変なことだね」

「この薄墨華魁に入れあげて、しんしょう身上を潰したのが十六人、死んだのが三人」

「矢張り化物じゃないか」

「それを本郷三丁目の葉種問屋の若主人、吾妻屋永左衛門が、千両箱を積んで身請みうけをし、自分の家へ引取つて内儀の位に据えたのはツイ二た月前だ」

「内儀の位は嬉しいな」

平次のからかいにも構わず、八五郎は報告を続けるのでした。

「吾妻屋永左衛門は、三十そこく、金があつてへえけえが上手で、ちよいと好い男で、道楽者の癖に少しケチで、——薄墨大夫のお染さんと並べると、少しヒネてはいるが見事なめおとびな女夫雛めおとびなですよ——」

「それほどの大夫を根引いて宿の妻にすると、納おさまらないのが諸方にあるのも無理はないでしょう、ね、親分」

「俺に相談することがあるものか、話の先を急ぐがいい」

「一番納まらないのは、万両分限の身上を費い果して、乞食のようになった伊豆屋の虎松、こいつは憑つかれたようになって、夜も昼も、吾妻屋の近所をうろくし、間がよくば一眼でも、昔の薄墨華魁——今は眉を落した、内儀のお染さんの顔を見ようとして居る」

「浅ましいことだな」

「あつしだつて、万両という身上をつぶしたら、そんな心持になるかも知れませんか」

「幸い、五両と纏まとった金に、めぐり逢たつた例ためしもあるめえ」

「有難い仕合せで——ところで、薄墨が吾妻屋の女房になって、納まらなかったもう一人は、お弓町に住んでいる浪人者で、大井久我之助という好い男だ、年の頃は三十二、三。二本差には違えねえが、薄墨華魁に入れ揚げて、小藩のお留守居ながいとまだったのが永ながの暇いとまになつたとかで」

「——」

「ちよいと金があつて好い男で、へえけえは下手だが小唄と鼓の上手で、これは間違ひもなく薄墨の深間ふかまだつたそうですよ。今は浪々の身で金つ氣とは縁が無い。薄墨の年の明けを待つて二人は一緒になろうなんてケチな事を考えて居ると、横から飛出した吾妻屋永左衛門が、千両箱を杉なりに積んで『お先に御免』とも何んとも言わずに、薄墨華魁をしよつ引いて行き、誰にも相談をせずに、元服させて『お染』と親のつけた名前と呼ぶことにした——こいつは大井久我之助、納まらないのも無理はないじゃありませんか」

「無理とは言わないから、其先はどうした？」

「八月朔ついでち日のあの大雨の降つた晩——春日町の運座のけえへ行つた吾妻屋永左衛門、供の小僧を先へ歸して、たつた一人でお弓町へ差かかると、いきなり闇の中から飛出して斬りかけた者がある——誰だと思ひます、親分」

「お前でねえことは確かだ」

「錢形の親分、さすが眼が高え」

「ふざけちやいけねえ」

「浪人者の大井久我之助ですよ。二本差の癖にしやがって、女を奪とられて、町人に暗討を仕掛けるなんて、風上にも置けねえ野郎じゃありませんか、幸い吾妻屋永左衛門、少しや

つとうの心得があるので、泥の中へ引っくり返っただけで、怪我はしなかった」

「それから」

平次にも、少しばかり話が面白くなって来た様子です。

「——でも握りにぎつ拳こぶし一つじや、斬り結ぶわけに行かねえ、さすがの吾妻屋も持て余して居るところへ同じ運座の帰りのこれも俳人仲間の湯島の国府こくふ弥八郎様を通りかかり、驚いて飛込んで、マア〜と引わけた」

「それっ切りだろう、女出入はそんなことで市が栄えるのが筋書きさ」

「ところが今度は泥んこになった吾妻屋が納まりませんよ、このなりじや恋女房のお染のところへ帰れない、第一武家が町人を暗討にするとはい卑怯千万、この納まりをどうしてくれるとねじ込んだ」

「成程な、——で、どう話がついたのだ」

「つきませんよ、どっちも詫を入れる気は無いんだから、仲に入った国府弥八郎さんも大困り、いずれその内に、ジャン拳けんか何んかで格好をつけるでしょうが——」

「そんな事で済むのかな」

平次はこの事件の底に、何やら根強く横たわって居る、無気味な人の怨みを感じないわ

けには行かなかつたのです。

## 三

果して、吾妻屋永左衛門と、大井久我之助の鞆当ては、一応表向きは納まりましたが、二人の心持は執拗に深刻に、行くところまで行き着いてしまったのです。

それから十何日、丁度八月十五日の名月の晩に、吾妻屋永左衛門は小宴を開いて、大井久我之助と国府弥八郎を呼び、表向きは仲直りの杯を交わすということにして、実は退のつび引きならぬ二人の間の蟠わだかまりの晩を、この献こんだ立てで、一挙に片付けようとしたのも無理のない成行でした。

人妻に恋するのは不都合千万と言っても吾妻屋の女房のお染は、玉屋小三郎抱かかえの遊女薄墨の後身であり、その間夫まぶだった大井久我之助の手許には、薄墨の書いた起請きしょうが十三通、外にとろけそうな文句を綴った日文ひづみが三百幾十本となり、このまま諦めるにしては、二人の仲はあまりにも深間ふかま過ぎて、暗討まで仕掛けられた吾妻屋永左衛門にしても、寢覚ねざめのよくなかつたことでしょう。

「先ず、どうぞ」

深怨の久我之助と、時の氏神の国府弥八郎と、連れ立って来たのを、主人の永左衛門、自ら案内に立って、設けの席に導き入れました。

それは『かねやす』に背を向けた、東向の裏二階で、十五夜の月はもう、町並の屋根の上に昇って居り、縁側には型通りの祭壇が、青白い月の光を受けて、肅然と静まり返って居ります。

部屋の中にはわざと薄暗い行灯あんどんが一つ、主客席に着くと、待って居ましたと言わぬばかりに、手順よく膳が運び出されるのです。

それは気まづい月見の宴でした。時の氏神の国府弥八郎が、一人で弁じ立てますが、主人の永左衛門も、客の久我之助も、黙りこんで受け応えをするでもなく、国府弥八郎の駄洒落が騒々しく空廻りをして、一層座を白けさせるだけです。

「入らっしゃいませ」

ほんのりと掛香かけこうが薫くんじました。どうかしたらそれは、世にも稀なる、あで人の肌の匂いだったかも知れません。顔を挙げて見ると、空の色よりも青い小袖、ほの白い顔あかりが灯あかりの側にパツと咲いて、赤い唇だけが、珠玉の言葉を綴なまって艶めかしく動きます。

久我之助も弥八郎も、思わず丁寧過ぎるほど丁寧に礼を返しました。

眉こそ青々と落して居りますが、頬の曲線の柔かい細面、顔を伏せると、美しい鼻筋がスーツと通ります。

「御内儀、飛んだ御世話に相成る」

などと国府弥八郎は、取つてつけたような世辞を言いますが、素より白けた座を救う由もありません。

お染はさすがに、この座の息苦しさに堪えられなかったものか、間もなく引下つてきて、それからの酒は羽目を外しました。

主人の永左衛門もさることながら、客の大井久我之助は、いくら呑んでも酔が発しないらしく、まさに鯨飲という物凄さです。

座を幹旋してくれるのは、特に呼んだ若い芸子が二人、これが内儀が引込んだ後の座を取持つて、必死と骨を折つて居る様子ですが、月の光に照されて、海の底のように静まり返った一座の空気は、三味線でもドラでも、感興を掻き立てる工夫はありません。

「さて、御両所」

月まさに三竿、酒もやがて爛酔に入つた頃、主人の永左衛門、改めて膝を直しました。改まって何事じや、御主人、今夜はもう六つかしい事を言わぬ筈では無かつたか」

国府弥八郎は、両手を宙に泳がせます。

「いや、此ままでは、大井久我之助様もお気がお済みになるまい、抜刀で脅かされた私も、町人ながら諦め切れません」

「——」

「国府様の御はからいで、一応は納まりましたが、納まり難いのは、大井様と私の胸のうちでございます」

「何を申すのだ、御主人」

「私が町人でなく、二本差している身分の者なら勝負は兎も角として、一応は大井様の御相手をいたすべきですが——」

「——」

大井久我之助は、真つ蒼な顔を振り上げると、そつと一刀を引寄せます。

「町人の悲しき、算盤そろばんを持つのが精一杯で大井様のお相手はいたし兼ねます——が、そうかと申して、犬や猫のように、何んの手向いもせず、斬り殺されてしまつては男と生



れた甲斐がございません」

「――」

「で、一つ、妙なことを思いつきました」

「――」

落着き払った吾妻屋永左衛門の言葉に、妙な殺気をカキ立てられて、大井久我之助も、国分弥八郎も、思わず固唾かたずを呑みました。

「もういいでは無いか、御主人、酒だ、酒だ」

弥八郎はそれを停めようとあせりませんが、主人永左衛門の強大な意志に圧倒されて、今となつてはもう、何んの力もありません。

「その酒で思いつきました――私は商売柄、ごく内密で長崎の異人から手に入れた、南蛮物の大毒薬」

「?」

「それを熱爛あつかんに解とかして、一本の徳利に仕込みました――此処に酒の入った徳利が二本ございます。いづれも模様も何んにも無い、伊万里いまりの白い徳利、一本には唯今申上げた南蛮物の毒酒が入って居り、一本には唐土もろこしから渡つた、不老長寿の靈薬が入って居ります。

この通り」

「――」

主人永左衛門は、盆の上に並べた二本の徳利を、物々しくも座の真ん中に据えたのです。  
「私は薬種屋渡世の冥利みょうりに、この二本の徳利で、大井久我之助様と果し合いがいたし度いのでございます。このうち、毒酒の方を呑めば、肺腑はいふを破って立ちどころに死にますが、薬酒の方を呑めば、不老長寿とまでは行かずとも、神氣爽やかに、百病立ちどころに癒えると申します」

「――」

「大井様と私は、どうせ並び立たない二人でございます。此先又お氣が變つて、暗がりから斬りかけられては、町人の私は防ぎようはございません。そこで、この二本の徳利のうち、どちらかを一本、先ず大井様に選んで呑んで頂き、残ったのを一本、私が呑むといったら如何なものでしょう」

「それは卑怯」

大井久我之助は勃然として膝を立て直しました。

「飛んでもない、――同じ形の徳利で、どちらに毒が入って居るか、それとも薬が入って

居るか、この私にもわかり兼ねます。その上大井様に先に選んで頂き、残ったのを私の分ときめ、一緒に呑むとすれば、これほど立派な果し合いはあるまいと存じます」

「武家と町人の刀を抜いての果し合いよりは、此方がよっぽど公明正大ではございませんか——選ぶのは大井様が先でも、呑むのは一緒といたしましょう、さあ、大井様」

「臆おくれましたか、大井様」

「闇から飛出して、町人に斬りつけるのと毒酒薬酒の果し合いと、何方どっちが卑怯か」

「恐ろしい緊迫でした。行灯あんどんは丁字ちようじが溜たままって、ジ、ジと瞬まきますが、三人の大的男は瞬まきも忘れて、互の顔を、二本の徳利を、洞うろな眼で見廻まわすのです。」

「あれッ、御新造ごしんぞうさま様」

隣の部屋は、火の付いた騒さわぎでした。

「何うした、騒々しい」

吾妻屋永左衛門は僅かに身体を動かして振り返ります。

「御新造様が、危い、あれッ」

二人の芸子は内儀のお染に絡みついて、その手から短刀をもぎ取ろうと争い続けて居るのでした。

「ならぬぞ、見苦しい」

永左衛門は思わず声が高くなります。

「でも、わちきのためにお二ふたかた方が——」

思わず里言葉の出るお染の薄墨大夫は、此処まで来る前に、この無法な企てを、どんなに止めたことでしょうか。

「男と男の意地だ——それとも夫の私が、もう一度泥の中に這わされ、虫のように殺されるのを見て居る積りか」

「——」

そう極めつけられると、お染は返す言葉もありません。短刀を取上げられて青い袂たもとに顔を埋めたまま、声を立てて泣く外は無かったです。

「よし、呑むぞ、拙者はこれだ」

大井久我之助は猿臂えんぴを伸して、一本の徳利を取りました。お染の演じた激情的な情景シーンに勇気をかき立てられたのでしよう、早くも大振りの盃に注いで呑もうとするのを、

「待った、二人一緒でなければ——」

国府弥八郎に注意されて、しばらく躊躇する隙に、残る一本の徳利は主人の永左衛門が取上げたのです。

「では」

これも同じく盃なみに波々と注ぐと、盆を引いて、顔と顔が、一方は薄暗い行灯に照され、一方は月を隠した庇ひさしの闇に染まって、

「行くぞ」

口と口へ、盃は一緒に触れたのです。

#### 四

「親分、とうとう大変なことになりましたぜ」

八五郎が、その報告を持つて来たのは、翌<sup>あぐ</sup>る日の朝でした。

「何が大変なんだ。——昨夜<sup>ゆうべ</sup>のお月見の馬でも曳いて来たのか」

「そんな気のきいた話じやありませんよ、いつか話したでしょう、薄墨華魁<sup>うすすみけい</sup>のことで鞆<sup>さやあ</sup>当<sup>あ</sup>てをして居る、二本差<sup>りゃんこ</sup>と薬種屋の若主人」

「間抜けな話さ、身請をされた女郎に未練を残す二本差の、顔を見てやり度え位のものだ」  
「ところが、もう見られませんか」

「逃げたのか、身を隠したのか」

「死んだんです」

「何？ 死んだ」

「薬種屋の若主人と、果し合いの毒酒を呑んで——」

「果し合いの毒酒？」

「吾妻屋が毒酒と薬酒を二本の徳利に入れて、何方でも好きな方を呑めと言ったそうで、暗討をしかけた弱い尻があるから、大井久我之助もこいつは断われねえ」

「で、選<sup>え</sup>つたのは運悪く毒酒で、浪人者が死んでしまったという話だろう」

「その通りですよ、お染さんの薄墨華魁は、短刀まで持出して止めたそうですが、二人は

意地になつて聴き入れなかつたんですつて」

「吾妻屋はそれで清々したというのか」

「ところが大違いで——」

「まさか華魁が後追い心中をしたわけじゃあるめえ」

「いえ、薄墨華魁はいいあんべえに無事でしたが、薬酒を呑んだ積りの吾妻屋の若主人永左衛門も、七転八倒の苦しみで、毒酒を呑んだ大井久我之助の直ぐ後から息を引取りましたよ」

「毒は両方の徳利に入つて居たのか」

「そんな筈は無いというんですが」

「行つて見よう、八、こいつは厄介なことになるかも知れない」

「へッ、そう来なくちゃ——お蔭で薄墨華魁の元服姿が拝めるといふものだ」

「馬鹿だなア」

平次は大きく舌打をしながら、手早く仕度を整えました。

八五郎のような桁けたの外れた貧乏人はずでさえ、遊女崇拜の風に染まずには居られなかつた時代、薄墨の美貌の作つた悲劇の恐ろしさに、さすがの平次も肝を冷やしましたが、事件は

これがほんの発端で、次から次へと、不思議な展開を続けて行くのです。

## 【第二回】

一

錢形平次は、吾妻屋永左衛門の女房お染——かつ曾ての玉屋小三郎抱え遊女薄墨と相對して居りました。

消えも入るような、歎きの美女の、哀れ深くやるせない姿を見つめて、平次はさて何んと言いだしたのか、暫くは言葉もありません。

多い毛は襟のあたりで惜気もなく切つて、紫の紐で結んであり、好みの青い衿に黒い帯、ぎょうし凝脂豊かなくせに、異常に細そりした身体を包んで、深い歎きに身を揉むごとに、それが蜘蛛の巣に掛つた、美しい蝶をさいなむように、キリ／＼と全身を絞り上げるのです。

平次はこんな女に逢つたのは、生れて始めての経験でした。それは単に美しいとか愛嬌があるとか言つた、通り一ぺんの形容詞で片付けられる種類の女ではなく、人間の女性か



ら、五濁五惡の血肉を抽き去つてその代りに、天人の玉の乳鉢で煉つた、真珠の露を入れ換えたと言つた感じですよ。

遊女崇拜を土台にした江戸の文化は、大部分恥つ搔きな馬鹿々々しいもので、それは人類の歴史の中の、最も薄汚い頁であつたに相違ないのですが、売春婦を神格化し、仙台様に吊し斬にされた高尾を、貞烈無比な女と信じた時代の遊女は、厳しい選択と、激しい修業と、かなり高い教養を積んだことも事実らしく、「歌舞の菩薩」という形容詞が、必ずしも出鱈目とは言えないものがあつたのでしよう。

大門を入れれば、極楽浄土——と当時の人は信じ切つて居たのです。その極楽浄土に棲む三千の菩薩達、その中でも、入山形に二つ星と言われる、松の位の大夫は、今日のミス何んと言つた、お手軽なもので無かつたこともうなずけるのです。

遊び嫌いの銭形平次、遊里へ足を踏み入れるのを、——当時の道徳とは逆に、男の恥のように思つて居た平次も、眼の前に近々と見た、歎きの大夫、薄墨のお染の、悲しんで傷らざる、上品で痛々しい姿に、思ひも寄らぬ驚きを味わいました。

洗練に洗練を重ね、一点のしみも留めない女の清々しさ、恐らく、そのあらゆる分泌物が馥郁として匂い、踏む足の下から、百花妍を競つて咲き乱れることでしょう。これ

でこそ、十六人の男に身代限りをさせ、三人の男の命を奪りもしたのです。さしも堅固の錢形平次でさえ、こう相對していると、息詰まるような——それは不思議な女の魅力でした。

「どうしましょう、錢形の親分さん、私はもう」

頼る主人に死なれては、元の浮き川竹——の遊女生活に還るか、でなければ、生活の道をも一つも知らない、虫のようにか弱い女として、往來に投り出される外は無かつたのです。

「お気の毒なこと——毒酒の果し合いなどは、いかにも魔の差しそうな事だが、間違いが何処にあつたか、それは調べ抜かなきやなりませんよ、御新造」

平次は職業意識を取戻すと、昨夜事件の起つた部屋に案内して貰いました。

月見のために用意された、東向二階の八畳で、六畳の次の間があり、さすがにあわてたものか、月見の用意なども昨夜のまま、薄や萩が、真昼の陽の中に、ユラ／＼と影を落して居るのも、わびしく哀れな姿です。

「お膳はこう三つ、主人は此処で、お客様お二人は此処でございました。銚子は引込めて、盆の上に徳利が二本、それが出た時は、私も芸子達も、皆んな次の間へ追いやられました」

内儀お染——薄墨大夫の説明はなかく／＼行届きます。

二本出した徳利、一本には毒、一本には靈藥が入って居る筈のが、二本共毒であったのでは、其処に種も仕掛けもある筈は無く、お染の説明はどんなに念入でも、銭形平次の調べの役には立ちそうもありません。

「その最後の酒の席に、誰も入って来た者は無かつたのかな」

「誰も入る筈はございません」

「酌は？」

「二人の芸子に任せました。私がいましては、大井様に当てつけがましいと存じまして」

「お爛かんぱん番は？」

「お勝手に任せましたが」

お染の答は何んの淀みもなく、平次にしても、これ以上立入って訊きくこともありません。

## 二

「親分、五丁目の杏きょうざい斎先生が、お話をし度いことがあるとかで、下で待つて居ります  
が」

八五郎がそう言つて来たのをきつかけに、平次はこの美しい女房の囚とりこから解放されて、階下のひと間に案内されました。

「これは、錢形の親分、忙がしいところを気の毒だが、少しお耳に入れて置き度いことがあつてな」

五丁目で売込んだ本道の杏齋が、平次を迎えて大きな坊主頭を振り立てます。

「杏齋先生、お話と仰しやるのは」

「少々他聞を憚はばかるが」

眼顔で誘い合つて、二人は部屋の隅に、吹き寄せられたように顔を突き合せました。

「どんな事で？」

「昨夜、あの騒ぎに立ち会つた私が、医者としてはなはだ腑に落ちないことがあるのじゃ」  
「?」

「外でもない、大井久我之助様の命を奪つたのは、日本には類のない薬で、これは恐らく南蛮物であろう、——ところが、暫く後で発病した、此家の主人永左衛門殿の呑んだのは、それと全く違つたありきたりの、石見銀山鼠捕りいわみぎんざん、つまり砒石ひせきじゃ、二人の症状はまるで違う」

「念のために、騒ぎに紛れて誰も気のつかぬうちに、私は二本の徳利を見付け、封印をして持つて帰つたが、家で調べてみても同じことだ、徳利は伊万里の無地で、一寸ちよつと見えてははじめもわからぬが、中味は全く違った、二様の毒酒が入つて居るのじゃ」

「それは容易ならぬことですが、杏齋先生」

「全く容易ならぬことだ、——これだけ申上げたら、親分の調べに、何かの助けになろうと思つてな、いや、忙しいことじゃ」

杏齋先生は、自分の言うだけの事を言うと、ろくな挨拶もせず、サツサと歸つて行くのです。

「親分、妙なことになりましたね」

八五郎は、話し度いこと一パイ溜めた調子で、庭から顔を出しました。

「何が妙なことなんだ」

「あんな良い女が、この世の中に生きて居ると思うと、あつしはこう、張合のあるような、情けないような、死に度くなるような氣持になりますよ」

「それが妙なことかえ」

「外にもまだありますかね」

「どんな事？」

「下女のお友が、徳利の酒を下水へ捨てて居るから、私はあわてて止めましたよ、半分はもう捨てられてしまいました。が、まだ残って居るでしょう」

八五郎は懐中から白い伊万里焼の徳利を出して平次に見せるのでした。

「もう一本あったのか、毒酒の入って居た二本は、あの杏齋先生が持って行った筈だ」

平次は受取つて匂いを嗅いで見ましたが、酒の匂いの外には、何んの特徴もありません。  
「少し嘗めて見ないか、八」

「御免蒙りましょう、あつしはまだ死ぬのに少し早いようでもっともあんな女と三日も添い遂げた上ならコロリと死んでも化けて出るような未練がましいことはしませんかね」

そんな太平楽を言う八五郎です。

「良い心掛だ、口惜しかったら千両箱を杉なりに積んで見ろ、お前の望み通りになるぜ」

「有難いことに、それが出来ないから、百までも生きますよ」

「無駄は止して、下女のお友は自分の勝手な見でこの徳利の酒を捨てて居たのか」

「訊きましたよ、うんと脅かしながらね、三十八にもなつて、口の隅をただらせて居るつ

まみ喰いの名人だ、あんまり利口でない代り、何んでもベラ／＼しやべってしまいますよ」  
「どんな事を」

「万一、その徳利にも、毒が入って居ると怖いから、早く捨てた方がよい——つて、人に教えられたんだそうで」

「誰がそんな知恵をつけたんだ」

「手代の佐太郎ですよ——ちよいと良い男で、薄墨華魁を観音様の化身けしんのように思つて居る——これはあのこまちやくれた小僧の春松の悪口ですがね」

「よし、その佐太郎というのを捜してくれ」

「へエ、先刻さつきまで其辺に居ましたが」

八五郎は店の方へ飛んで行きましたが、その時はもう佐太郎は何処かへ出かけた後で、店にも姿を見せなかつたのです。

### 三

お勝手へ廻ると、乞食のような不気味な男が一人、下女のお友と立話をして居りました

が、平次と八五郎の姿を見ると、ひどく驚いた様子で、横つ飛びに裏通りに姿を隠してしまいました。

「あれは何んだえ」

平次はぼんやり口を開けて立って居る下女のお友に訊きました。

「虎——という男です、満更まんざらの乞食じゃありません、あれでも昔は伝馬町の伊豆屋の若旦那で、虎松さんと言われた良い男の成れの果てで——」

口の隅をただらした女も、なか／＼洒落しやれたことを言います。

「あ、薄墨華魁に入れ揚げて、良い身上を棒に振ったという——」

八五郎は横から口を入れました。それは界限に隠れもない噂いましの種で、若い者を戒める、年寄の一つ話にもなつて居りました。

平次はチラリと見ただけですが、成程そう言えば、満更の乞食では無いらしく、身みなり扮も自墮落ではあつたにしても、そんなにひどいものでは無く、顔かおかたち容も尋常、身体なども逞しくさえ見えたのです。

「あの男はチヨイ／＼此処へ来るのか」

平次は訊ねました。



「毎日其辺へ来てウロ／＼して居ますよ、御新造の顔を、一と目でも見たいんでしょう、あんなになっても、男つて本当に、身の程を知らないものですねエ」

この女も時折は、こんな一とかどの事を言うのでした。

「ところで、手代の佐太郎は何処へ行つた」

「知りませんよ、私は」

「お前に徳利の酒を捨てろと言つたそうじゃないか」

「——万一、その徳利にも毒が入つて居ると危ないからつて言うんですもの」

「こんな徳利は外に無いのか」

「もう一本ありますよ、四本二対になつて居たんで」

「どれ」

お友が戸棚から出してくれた、四本目の徳利を嗅いで見ましたが、これは酒を入れた様子もなく、中までカラ／＼に乾いて居ります。

「昨夜のお爛は誰がした」

「佐太郎どんですよ、私は料理の方が忙しかったんですもの」

「二階へ運んだのは、芸子達で」

「誰だえ、あれは？」

平次は不意に顔を挙げました。

「御新造さんの弟さんで、米吉さんですよ」

そう言つて居るところへ、十七、八の前髪立の美少年が、何心ない様子で、チヨロチヨロとお勝手を出て来ました。

「ちよいと、米吉さんと言つたね」

「へえ」

「お前は御新造のお染さんの本当の弟か」

平次は突つ込んだことを訊きました。

「よく似ているそうですから、見て下さい」

米吉は微笑を浮べたままの顔を突出すのです。邪念の無い細面で、小柄で色白で、女の児のようですが、声變りのせいか、声は思いの外太く、態度に何んとなく人を喰つたところがあります。

「生れは？」

「上州——でも、<sup>なか</sup>仲町で育ちました、姉の仕送りで」

「昨夜は何処に居たんだ」

「仲町の知合の家へ行つて、お月見の御馳走になつて、とうとう泊つてしまいました」

「此処に客のあるのを承知でか」

「後で聞いたんです、姉さんは、私を子供扱いにして、酒の席なんかには寄せつけません  
「よ」

縞物を短かく着て、何処か大店の小僧とも見える美少年米吉は、平次の問うままに、  
蟠りもなく答えます。

「ところで、昨夜の芸子は何処から呼んだ、湯島か、芳町か、それとも——」

「仲町ですよ、少し遠いけれど、泊めてやりやいと、御新造様の知合いの家の芸者衆で、

何んでも巴家とか言いましたが——」

お友の記憶は甚だ覚束ないものでした。

「どんな妓達だ」

「綺麗な芸子さん達でしたよ、一人は芸達者で、一人はそりやお人形のように」

お友は眼を細くします。

平次と八五郎は、そんな事で切上げて、本郷の通りへ出ました。

「親分、カラクリはわかりましたか」

八五郎はキナ臭い鼻をして見せます。

「いや、少しも見当はつかない、最初から二本の徳利に毒が入って居るから、吾妻屋永左衛門は、大井久我之助と一緒に死ぬ気でやったことになるが、そんな馬鹿なことがある筈は無い。矢張り最初は二本のうち一本には毒が入って居なかつたのだ、それを、何処で摺<sup>す</sup>り換<sup>か</sup>えたか、誰が毒を入れたか」

平次もそれ以上のことはわからない様子です。

「何処へ行くんです、親分」

「五丁目の杏齋先生のところだ、三本目の徳利の酒に、毒があるか無いか見て貰い度い」  
「成程ね」

二人は杏齋の門に立ったとき、杏齋先生は病家へ駕籠<sup>かご</sup>で出かけるというところでした。  
「先生、三本目の徳利が見付かりましたよ、これに毒があるか無いか、御手数でも調べて頂き度いんですが」

平次が駕籠を停めて、袖の中から白伊万里を出し、杏齋先生の鼻の先へ出すと、杏齋は駕籠に乗ったまま、

「どれく匂いは無いな、味は——？」

と掌に酒を垂らして、ペロくなと嘗めるのです。

「先生、毒が入って居ちや危いじやありませんか」

平次の方が驚きました。

「なアに、大丈夫、私は不死身だよ——これ位のこと命に拘わる毒というものは無い筈だ」

などと舌鼓を打って見せるのです。

「あつしのような無法者も、そいつは気味が悪くて嘗め兼ねましたよ」

それは八五郎でした。

「いや、嘗めなくてよかつたよ、此酒には矢張り南蛮物の毒が入って居る、嘘だと思ふなら、少しやって見るがよい、舌を絞るような、悪く苦いところがある」

杏齋先生は言うだけの事を言うと、駕籠を急がせて行つてしまいました。

「親分、驚きましたネ」

「驚くことは無いよ、三本共毒の入って居る方が、筋道がはっきりして居るんだ、——今日はこのまま帰って考えて見るとしよう」

平次はそのまま事件に背を見せるのでした。

#### 四

毒酒事件がそのまま迷宮入りになって、錢形平次の叡智も、一向埒<sup>らち</sup>があかぬまま、幾日か過ぎました。

この辺で八五郎が、「大變」を持ち込んで来る段取ですが、今度は思いも寄らぬ方面から、その「大變」が舞込んで来たのです。

吾妻屋の手代佐太郎は、あの日から行方不明で、主人永左衛門の葬いが済んでも帰って来ず、平次は精一杯手を伸して居たにも係らず、そのまま江戸の埵<sup>るっぼ</sup>の中に溶け込んでしまったかと思われてから四日目、橋場の渡しの近くに、佐太郎らしい水死人が上ったという知らせを、吾妻屋の内儀お染の弟、あの美少年の米吉が教えに来てくれたのです。

平次と八五郎が橋場へ行つて見ると、丁度検視も済んだばかり、吾妻屋から番頭の嘉七と、小僧の春松がやって来て、死骸を引取つて行こうという間際でした。

「錢形の親分さん、大變なことになりましたが」

重なる不祥事に、番頭の嘉七は泣き出しそうにして居ります。

「どれ〜」

筵むしろを取つて見ると、紛れもなくそれは、吾妻屋の手代の佐太郎で、その精力的な身体や、ちよいと良い男に变りは無く、濡れ鼠になつて着崩れて居ても、渋い好みの衿あわせなどは、水死人には勿体ないようです。

「おや、ひどい傷だが」

死骸の後頭部のひどい傷は、石か何んかで殴つたものでしょう、柘榴ざくろのように割れて、水にふやけて居りますが、これをやられてから、水に投ほうり込まれたらしく、身体に水死らしい特徴は一つもありません。

「山谷堀から流れて来たのかな」

八五郎でした。

「昨夜の上げ汐で、下の方から押し流されて来たのかも知れない」

それはいずれにしても、昨夜のうちに水に投げ込まれた事は間違ひありません。

「懐中物は？」

「百も持つちや居ませんよ、抜かれたんですね」

番人は忌々しそうです。

「ところで番頭さん」

「へえ〜」

嘉七はあわてて振り返りました。ひどく萎びた中老人ですが、吾妻屋の先代から勤めて居る白鼠で、着実そうなことは此上なしです。

「昨夜吾妻屋から出た者は無いのかな」

平次の問は当然でした。

「一人も出たものはありません、御新造様は早くからお休みになりましたし、米吉さんは二階へ、私と春松は戸締りを見廻つて、その下へ休みました。お友は出るわけも御座いません」

小僧の春松は、それを肯定するように、黙つて聴いて居ります。不在証明は吾妻屋の屋根の下に住んでいる者に限り、極めて完全です。

「ところで、もう一つ、それから御新造の様子はどうか」

平次は突つ込んだことを訊ねました。

「見上げた方で御座います、朝晩念仏三昧で、慎み謹んで居ります。一足も外へ出るこ



とではございません」

「——」

「そう申しては何んですが、あれが君傾城の果てとは、どうしても思われません、大したお心掛けでございます」

嘉七の言葉は老実そのもので何んの誇張があろうとも思われません。

やがて釣台に載せた佐太郎の死骸は動き出しました。後ろへしよんぼりと従う嘉七と春松、少し離れて平次と八五郎も、途中までは一緒に行かなければなりません。

「変な殺しですね、——あの毒酒の果し合いの続きでしょうか」

「あつしは、あれはあれ、これはこれという気がするんですが、佐太郎はフラ／＼と遊びに出て、吉原で居続けたあげく、一文無しになって、帰るところを、辻強盗か何んかにやられたんじゃないやありませんか」

八五郎は一応の順序を立てますが、

「主人が変死した翌日は、葬式も出して居ないのに、奉公人の佐太郎が吉原へ遊びに来たというのか」

平次にそう言われると一言もありません。

## 五

湯島の天神下にかかると、

「あの晩仲裁に入った、国府弥八郎様のお屋敷は此辺じゃないか」

「直ぐ其処ですよ」

「ちよいと寄つて見よう」

平次は良いところに気が付きました。

国府弥八郎は小禄ながら聞えた御家人で、四十年配の分別盛りを、道楽と洒落つ気で暮して居る武家でした。

「平次親分か、——よく来てくれた、まアまア寛ろいで、ゆっくり話して行つてくれ」  
などと友達付き合いで如才ありません。

「実は、あの晩——吾妻屋の毒酒の果し合いの時の様子を、詳しく伺い度いのですが」  
平次は早速要件に入りました。

「良いとも、どんな事を話せばいいのだ」

「徳利はたしかに二本出たのでしようね——三本では無く」

「その通りだ、その前の酒は爛の良いのであったが、果し合いの酒は、白伊万里の徳利に入れた冷酒が二本、——吾妻屋がわけを話して、果し合いを申出ると、大井氏はさすがに驚いたらしく、暫くは睨み据えて口もきかなかったが、隣の部屋で内儀のお染殿が、自害しようとする気配を聴くと大井久我之助殿、サツと顔色を変えて、二本の徳利のうち、吾妻屋の方に寄つた遠いのを取上げた」

「その時席に三人の外に人は居なかつたので？」

「居なかつたが——一人の若い芸子がアタフタと入つて来て、吾妻屋に——御新造様が——と囁いた。吾妻屋は面倒臭そうに払い退けて、邪魔だ、向うへ行つて居ろ——と叱つた」  
「それは初耳でした」

「つまらない事だから、言わなかつたのだ」

国府弥八郎ことも無げに言うのです。

「その時、芸子は徳利を換えた様子はありませんか」

「気が付かなかつた、何分、唯事ならぬ二人の意気込で、私も気が張つて居た、——が二人の芸子がお内儀の自害を止めて、そのうちの一人がそれを教えに来たことに間違いは無

く、徳利を換える隙などは無かった筈だと思つ

「それでしうか」

平次は何やら腑に落ちぬらしく考え込むのです。

「ところで、平次親分は、これをどう思う、吾妻屋は大井久我之助殿を殺して、最初から自分も死ぬ気でやつた細工では無いのか」

「飛んでも無い、——千両箱を杉なりに積んで、あれだけの大夫を身受けた吾妻屋の主人が、一年も経たないうちに死ぬ気になるでしうか」

「成程な、諸行無常を感じるのは、貧乏人か、振られ男に限るといわけか、ハツハツハツハツ」

国府弥八郎は自分の警句に堪能してカラカラと笑うのです。

### 【第三回】

無事な日は五日、七日と過ぎました。

大井久我之助と、吾妻屋永左衛門を、一ぺんに殺した毒酒の秘密もまだわからず、吾妻屋の手代佐太郎を、石で叩き殺した下手人の見当もつかぬうちに、お月様は一と晩毎に痩せて、江戸の街もやがて悪魔の跳梁に都合の良い、闇夜続きになって行きます。

「親分、今日は、良い日和ですぜ、ちよいと遊びに出ちやどうです、ジツとして煙草ばかり吸って居るのは、身体のために毒ですよ」

などと、一とかどの事を言いながら、子分の八五郎は幾日目かの顔を見せました。

「遊びに行くほどのお小遣でもあるかえ、大層機嫌が良いようだが」

平次は悠然として、日向のとぐろをほぐそうともしません。

「御存じの通りで、金には縁がありませんよ、もつとも女の子には持て過ぎて困るんだが」  
そう言つて長<sup>な</sup>んがい顎を撫で廻す八五郎です。

「へエー、大層なことになるものだね、世<sup>よなみ</sup>並が悪いわけだ」

「そう馬鹿にしたものじゃありませんよ」

「相手は何処のおん婆さんだえ」

「そんなイヤな代物じゃ無いんで、へッ、入山形の二つ星、眉は落したが、お灯明をあげ

度え位の代物で——」

「吾妻屋の後家じゃ無いのか、あれは止せよ八、下手なちよつかいを出すと、飛んだ恥を搔くぜ、第一お前にはお職過ぎて、お染八五郎じや床ちよぼに乗らねえ」

平次は少しムキになりました。吾妻屋の後家、曾かつての薄墨大夫のお染が相手では八五郎、深草の少将ほど通ったところで、モノになる道理はありません。

「その吾妻屋の後家が言うんですよ『八五郎親分、済みませんけれど、毎晩泊りに来て下さいませんか、淋しくて心細くて、私は誰かにどうかされそうで、気味が悪くて叶わないんですもの、——親分は一人だそうだから何処からも尻の来る気づかいは無いんでしょ、後生だから』と、里さとなま訛りの抜けきれない言葉で口説いて、顎の下のあたりで、手を揉むような拝むような格好をします。その色つぽさというものは——」

「止さないかよ、馬鹿々々しい、お前がそんな格好をしたって、少しも色つぽくなんかないやしないよ、擦くすぐつ度い野郎だ」

「へエ、擦くすぐつ度いんですかねえ、あつしという人間は」

「お前と話をする、臍へそのあたりがムズムズするよ」

「まるで蚤のみですね」

「それほど思い込まれたら、八五郎も男冥利だ、二た晩三晩行って泊ってみるか」

「行ってもいいんですか、親分」

「用心棒に泊る分には構わねえが、吾妻屋へ婿入しようなんて了見は出さな」

「お職過ぎますかね、あの後家は？ 高慢で無愛想で、ヒヤリとしたところがある癖に、

何んかの弾みでニツコリすると、ゾツとするほど色っぽいところがありますよ、あの女は」

でも八五郎はイソ／＼と飛んで行きました。江戸一番のフェミニストの八五郎が、首尾よく用心棒の役目を果して、平次が期待する、吾妻屋の秘密を探って来るでしょうか、はなはだ覚束ないことです。

## 二

三日経たないうちに、八五郎はもう最初の報告を持って来ました。

「親分、あの家は変な家ですね」

その酢っぱそうな顔を見ると、勇敢なる騎士が恋の成功を納めたとは受取れません。

「まさかあの後家に手ひどく弾かれたわけじゃあるまいな」

「大丈夫ですよ、まだ亭主の三十五日も済まないうちから、私がそんな事をするものですか」

「大層義理堅い人だね」

「第一あの女は、あつしが側に居ると、一日一と晩経つても、白い歯も見せませんよ、妙にこうヒヤリとして」

「お前というものに用心して居るのさ」

「そんな筈はねえと思うんだが——」

八五郎の甘さ、

「ところで、変な事というのは何んだ」

「皆んな変ですよ、主人の死んだのを良いことにして、番頭の嘉七はセッセと取込んで居る様子だし、下女のお友はつまみ食いばかりして居るし、後家のお染は取済して冷んやりとして居るし、弟の米吉は、姉の部屋へばかり入り込んで、こちとらには鼻汁はなも引っかけないし——あの米吉という野郎は、氣の知れない若造ですよ、物腰は女みてえで妙に物静かなくせ、ひどく氣象に激しいところがあつて、小僧の春松などは、うっかり嘗なめた事を言うと、ひどい眼に逢わされますよ」



「綺麗な男だったな」

「さすがは姉の弟で、芝居の色子にも、あんな綺麗な男の子は滅多にありませんね、小柄で、華奢で、声変りで変な太い声さえ出さなきや、女の子と間違えますよ」

「それっ切りか」

「まだありますよ、橋場で殺された佐太郎は、勿体なくも主人の配つれあい偶のあのお染さんに夢中だったんですってね」

「不都合な話じゃないか」

「もつとも、薄うす墨すみ華おいらん魁けんの客の一人だったというから、無理ありませんがね、知らぬは亭主ばかりで、女房が勤めをして居る時の客の一人が、店に居る手代だったとは、死んだ吾妻屋も気が付かなかつたでしょうよ」

「フーム」

遊女制度の不都合さで、金さえ出せば、誰でも客になれたことが、この不倫な結果を生んだのでしよう。

「主人が生きて居るうちは慎つつしんで居た様ですが、主人が殺されると忽たちまち羽をのして、三日経たないうちから、主人の後家に絡からみついて居たというから、佐太郎にも殺されるだけな

わけがあつたのかも知れませぬね」

「その佐太郎が殺された晩、吾妻屋の家の者は、一人も外へ出なかつた筈だな」

「相憎あいにく皆んな家に居たそうで、どう詮索しても、佐太郎殺しの下手人は、吾妻屋には居ませんよ」

「外に變つたことは？」

「何んにもありませんね。もつとも、あの下女のお友というのは出戻りだそうで、世帯の苦勞も情事いろごとの苦勞も劫こうが経て居ますから、妙なところへ眼まなこが届きますよ」

「――」

「佐太郎が惚氣のろけまじ交りに話したことや、内儀と米吉が、夜も昼も奥の部屋に籠こもつて、綾取りあやとり双六すわろく、鞠まりつき、と他愛もないことばかりして遊んでいることも、あの女が見届けてくれましたが」

「それから？」

「それつ切りですよ、あ、そうく、伊豆屋の虎松が、相変らず乞食からお釣つり錢ぜにの来そうな風体ふうていで、朝から晩まで吾妻屋のあたりをウロくして居まきア、後家のお染さんはそれを嫌がるまいことか」

「――」  
「虎松は身扮みなりこそ悪いが、若くて丈夫そうだから、うっかり追っ払うわけにも行きませんよ。番頭の嘉七などは、見て見ない振りで、あつしが気を揉んだ位じゃ、どうにもなりやしません」

八五郎の報告はぎつとこんなものでした。

### 三

それから又四、五日経ちました。吾妻屋の主人永左衛門の二た七日が済んで、月も九月に改まって間もなく、八五郎は二度目の報告を持って飛んで来ました。まだ朝のうちです。

「何んだ、八」

「大変なんですよ、親分」

八五郎は格子に絡みついて息を継ぎました。

「何がどうしたんだ」

「四人目がやられましたよ」

「四人目？」

「伊豆屋の虎松が、吾妻屋の裏木戸の前で喉笛のどぶえを切られて、血だらけになって死んでいきますよ」

「よし、手を緩めると、飛んでもねえ業をする畜生だ、行こう八」

平次は手早く仕度をする、十手を腰に、ポンと飛出します。

「あれ、まだ御飯が——」

うろく／＼するお静へ、

「すぐ帰けえつて来るよ——味噌汁のさめねえうちに」

本郷三丁目はさして遠い道では無く、簡単に埒らちをあけてと思つた平次も、こればかりは飛んだ見間違いでした。

物をも言わずに、吾妻屋の裏通りへ駆けつけた平次、木戸の前に、引取手もなく筵むしろを掛けてある、虎松の死骸の前へ立止りました。

「親分、飛んだ早い足ですね」

八五郎はフウ／＼言いながら追いつくのが精一杯。

「味噌汁の冷えねえうちに、下手人を縛しばる気で飛んで来たよ——おや、これはひどい」

平次は死骸を見張つて居る町役人や、番太ばんたの老爺に挨拶して、早速筵をハネのけました。死骸になつた虎松は、この時漸く三十二、三、分別も思想も一人前に円熟する筈の年を、薄墨華魁うまつに現うつつを抜かし、伝馬町で歌われた伊豆屋の身上をフイにしてしまつて、乞食同様の姿になりながら、一度契つた薄墨が忘れず、請出うけだされて人の女房になつた後までも、落ぶれ果てた姿で、ウロウロと付き纏まとつて、恥を恥とも思わぬ、不思議な生活を続けて居たのです。

顔立もよく整つて、格幅も見事ですが、恋に狂う型の人間によくある、やや肥ふとり肉じしの多血質で、脹はれつぽい眼、多い毛などが妙に人目につきます。

着て居るものは、昔の榮華を偲おもはせる絹物ですが、滅茶々に破れて、芝居に出て来る乞食という風体、皮膚の色も陽に焦げて、手足の垢かづいて居るのも浅ましきです。

傷は右首筋、ヒ首あいくちか何んかで、廻しながらザブリと切つたもの、返り血を受けないために、恐らくは後ろから手を廻して刃物を引いたものでしょう。

「刃物は、すぐ足の下ほの下水ほに投り込んでありました、——こいつは自害じゃありませんか」

「いや、これだけ切ると自分の手が血で汚れる筈だ」

「少しは血が付いて居ますよ」

「自分でやったのなら、そんなこつちやあるめえ、それに、右手を使って、こうは自分の喉を切れるものじゃないよ、——虎松は左利きひだりきなら話は別だが」

「もう一つ、鞆さやが虎松の懷から出て来ましたよ」

「小尻どつちは何方を向いて居た」

「外を向いて居ましたよ」

「落付いたようでも、下手人はあわてて居る証拠だ。小尻を外へ向けて、自分の懷へ匕首の鞆を突つ込む奴があるものか、それに、自分でやったものなら、鞆を自分の懷へしまい込まずに、反かえつて捨てるのが本当だろうよ——多分後ろから行って、声を掛けて油断をさせながら、刺したものだろう。虎松と親しい人間の作業だ」

平次の観察はさすがに行届きました。

「錢形の親分」

年配の町役人が、平次に声を掛けます。

「何んです、佐野屋さん」

「吾妻屋の内儀さんが、この死骸を引取つて葬つてやり度いと言って居るが、どうしたも

のでしょうね」

事情をよく知って居るらしい町役人はひどく腑に落ちない顔をします。

「奇特なことじゃありませんか、お望み通りにしてやったら、死んだ伊豆屋の虎松さんも、どんなに喜ぶことでしょう」

平次は簡単に賛成しました。吾妻屋の主人が死んで、まだ三十七日にもならないのに、生前の恋敵とも言うべき虎松の死骸を、後家のお染が引取るのは、一応出過ぎたことのようにも見られますが、裏木戸の外に死骸を晒さらして、何時までも諸人に見られるよりは、反かえってその方が恥を小さくする方法かもわかりません。

#### 四

「錢形の親分さん、さぞ、差出がましい女とさげしみなさんしたでしょうね」

死骸はお勝手の隣の、薄暗い部屋に移され、形ばかりの香花は供えられました。

平次と八五郎も、ツイ手伝ってやる気になって、何んとなく動いて居ると、やや一段落になった頃、後家のお染は沈んだ顔を、そつと廊下から覗かせたのです。

「いや、飛んだ功德くどくですよ、伊豆屋の虎松とも言われた人が、犬猫のように死骸を扱われ  
ちや可哀想だ」

平次は心からそう言った調子です。死んだ者には、何んのがめもある可べき筈は無いの  
です。

「そう聞いて安心いたしました。昔の恥になりますけれど、私のためには随分苦勞をなす  
った虎さんですもの、死んでしまえば、憎かろう筈はありません」

静かに部屋の中に入って来たお染は、黒つぽいあわせ袷、切髪が首筋に淀んで、素顔にほのか  
な紅を含んだのさえ、驚くべき効果的な魅力ですが、虎松の死骸の側に寄って、たしなみ  
よく香を捻ひねる姿は、あわれ深くも美しいものでした。

「ところで御新造——いや今では内儀さんと言った方がよいでしょう、——昨夜この家か  
ら、外へ出た者は無かったでしようか」

平次は場所柄を無視して、こう訊ねました。

「一人も無かった筈でございます。喜七どんと、お友に訊いて下さい」

「——」

「私は奥の部屋へ一人で休んで居りますし、弟の米吉はたった一人で二階へ、その階はしご子



段の下には、番頭の嘉七どんと、小僧の春松が休んで居ります。一人で外へ出て誰にも気取られないのは、下女のお友位のものでございましょう」

お染は掌を返して、口許へ持つて行きました。よつほど笑い度いのを我慢した様子です。「念のため、家の中を見せて貰います」

「どうぞ、御自由に」

お染は少しツンとして、自分の部屋へ引取りました、銭形平次の執拗な疑いに対して、きょうしん矯 愼 を発した姿です。それは怒った孔雀くじゃくのような、不思議な気高さと華やかさを持つたものです。

平次は番頭の嘉七に案内させて、ざつと家中を調べてみました。二階への階子段は一つで、その上に休んでいる米吉は、階子段の下の六畳に休んでいる嘉七と春松に知られずに、夜中便所へも起きられないことは確かでした。

内儀のお染の部屋は、階下の一番禺の六畳で、一応どの部屋とも掛け離れて居りますが、平次はその部屋の外に、無用な階子はしごが掛けつ放しであり、それを登って、ひさし庇伝いに行けば、米吉の寝て居る二階六畳の窓に、わけもなく達することを発見しました。

「八、あの庇から向うの窓へ行けるだろうか」

平次に声を掛けられると、階子から庇を渡って、米吉の部屋の前まで行って、変な顔をして戻って来た八五郎は、

「庇の上は鎌倉街道だ、散々苔が踏み荒されて、二階の窓は外からでも格子が外れますよ」と思いも寄らぬ報告です。

「よし／＼、それで大方わかつたよ、お前は下女のお友と仲好しになったようだから、精一杯口説いて見てくれ、昨夜何んか変ったことがあったに違えねえ、それから下つ引を二、三人狩り出して、伊豆屋の虎松の巢を突き留め、手一杯に捜させるんだ」

「親分は？」

「俺は吉原へ行って来る、——変な顔をするな、遊びに行くんじゃないやねえ、巴屋という芸者屋と、編笠茶屋の裏の当り屋という料理屋を探るんだ」

「承知しました、それじゃ」

「待ってくれ、もう一つ頼みがある」

「何んです、親分」

「お前も気が付いて居るだろうが、内儀の弟の米吉、男にしちやあんまり綺麗だ、どうかするとありや女じゃ無いのかな——声は太いが、音曲で喉をつぶすと、女でも随分あんな

声になることもあるだろう——それを試して貰い度いんだ、いきなり懐へ手なんか入れちゃいけないよ、何んとか、うまい工夫をして、——何をニヤ／＼笑って居るんだ」

「それならもう済みましたよ」

「何が？」

「あつしも、あの野郎がどうも女のような気がして仕様が無いんで——親分に叱られそうですが、とうとうやりましたよ」

「何を？」

「いきなり尻を捲めくつたんで、ヘツ」

「ひどい事をするな、お前は」

「男姿だから、ふざけた振りをしてやりや何んでもありませんよ。女なら尻を捲めくられると、キヤとかスーとか言っ*て*いきなりペタリと坐るが、野郎なら、ジツとして居て怒鳴るでしょう——此野郎、ふざけた事をしやがるとか何んとか」

「呆あきれた野郎だな」

「安心して下さい、ありや確かに男ですよ。毛脛けすねが大変で——その上切り立ての犢鼻ふんどし禪ぜんをして、威張いばって居ましたよ」

八五郎の説明は途方も無いものでしたが、この冒流行為も、相手が確かに男とわかっては、平次の神経を痛める程の事件でもありません。

## 五

平次は先ず吉原の巴屋へ行つて訊きましたが、女将は、おかみ

「あのお月見の晩、元の薄墨華魁からの使いで、お酌を二人本郷の吾妻屋さんへよこして貰い度い、どうせ泊めるから、遅くなつても心配しないようにとお話でしたが、一人は病気で出られなかつたので、お袖というのを一人だけ本郷へ駕籠かごで送りました」

という思いも寄らぬ挨拶です。

そのお袖というお勤に逢つて見ると、十五、六のなか／＼才気走つた娘で、

「向うへ行つて見ると、私より二つ三つ年上らしい、もう一人のお酌が居りました。柳橋から来たということで、自分でたよりという名だと言って居りました。唄はいけませんでしたが、踊りは一と通りで、何より、それは／＼綺麗な人でした」

そんなことを話すのです。その晩吾妻屋の主人と大井という浪人者の争いが始まってか

ら、二人のお酌は怖いので次の間に逃げて居たが、薄墨華魁が自害をしようとしたので、二人がかりでそれを止め、たよりが次の間へその事を知らせに行つて間もなく、大井という浪人者が苦しみ出し、続いて吾妻屋の主人も苦しみ出したというのです。

「あんな怖い思いをしたことはありません——でもたよりは何時の間にかやら歸つてしまつて、私一人、翌<sup>あく</sup>る日の朝まで、下女のお友さんの部屋にもぐり込んで顫<sup>ふる</sup>えて居りました」

お酌のお袖は、こう言うのでした。

「外に気の付いた事は無いのか」

平次はもう一と押し押しました。

「あの騒ぎの中でたよりさんが、袂<sup>たもと</sup>の下に白伊万里の徳利を隠すようにして、隣の部屋へ行つたようです」

「何？ それは本当か、大事なことだが」

「でも、そのまま持つて戻りました、——間違いはありません、変なことだと思つて、よく覚えて居ります」

「有難う、それでわかつた」

平次は巴屋を飛出すと、編笠茶屋の裏の小料理屋、当り屋へ行つて居りました。四十五、六の女房が一人、商売物の料理の仕度したくをして居りましたが、

「米吉のことですか、——あの子は薄墨華魁の先代の、矢張り薄墨と言つた華魁の隠し子で男の子のくせに、禿かむろになつて居ましたよ、可愛い坊士禿でした。先代の薄墨華魁が死んだ後は、何んでも色子になつたとか妙な噂もありましたが、吾妻屋さんに身請みうけされた二代目の薄墨華魁が見付けて来て、大層世話をして居りました。男つ振りが良いのと小柄なので、十七、八にしか見えませんが、もう二十より下では無い筈です。——女に化けるかと仰おつしやるんですか、それはもう、男姿よりは、女姿の方がピタリとする位で、地声は太い人ですが、裏声を使うと、どうしても女としか思えません」

女房の話は平次を驚かすに十分でした。どうして此処へ気が付かなかつたのか、毒酒と薬酒の詭計きげいがあまりにも鮮かだったので、さすがの平次の叡智にも盲点があつたのです。

「月見の晩、此処へ泊らなかつたのか」

「泊りやしません、宵に一寸姿を見せて、預けてある荷物を持って行きましたが——」

それで充分でした。引揚げて神田明神下の自分の家へ帰ると、八五郎はもう鼻の下を長くして待つて居ります。

「親分、大変なことを聴きましたよ、昨夜、あの取すました後家の華魁の、お染が——」

「乞食のような虎松を引入れて、大変な口説くどきをしたというのだろう」

「その通りですよ、下女のお友が一から十まで、隙見をして居たんですって——いやもう大変な見ものだったそうですよ」

「金のためには、国守大名にも乞食にも、平気で身売った女だ、虎松に脅おどかされてそれ位のことをするのは当り前だ」

平次は早くもそれを見通したのか、さして驚く色もありません。

「それから、虎松の巢はわかりましたよ、妻恋つまこい稲荷いなりの裏の物置、かき廻してみると、血の付いた手拭が出て来ましたよ、血の外ほかに泥が付いて、真中はむし糞むしつたように切れて居ますが——」

「その手拭に石を包んで、佐太郎を殴った上、大川へ投ほうり込んだのだ——手拭を捨て兼ねたのは乞食根性だが」

「すると」

「もうよい、行こう八、三丁目の吾妻屋だ、お前は下つ引をつれて行って裏表の出入口を張って居るんだ、俺は中へ入って少し捜す物がある」

平次は吾妻屋へ着くと、番頭の変な顔をするのを案内させて、いきなり二階の米吉の部屋へ行きましたが、押入の中の行李を捜しても、目当ての物は無かったのか、直ぐ様奥の一ト間——後家のお染の部屋に飛込んで、箆筒、長持、押入、戸棚と捜したあげく、思いも寄らぬところから、若い芸者の着そうな、派手な振ふりそで袖を見付けて、嘉七の鼻の先へ持つて行くのでした。

「この振袖は、月見の晩、年を取った方のお酌の着て居たものに相違あるまい」  
「へエ、そのようで」

平次は合図する間もありませんでした。裏口へ飛出した後家のお染は、下っ引のマゴマゴする手の下を搔いくぐって逃げてしまい、表へ飛出した美少年の米吉は、八五郎の手に、骨を折らせながらも縄を打たれてしまったのです。

\* \* \*

薄墨華魁のお染が、水死体になって大川に浮んだのはその翌あく日、美少年米吉は、吾妻屋永左衛門と、伊豆屋の虎松を殺した罪で、獄門になったのはその後のことです。

一件落着後、平次は八五郎の為にこう説明してやったのです。

「米吉は坊士禿から成人して色子になり、お染の薄墨太夫に拾われて、その間夫まぶになった



のさ。商売女のいか物喰いだよ。吾妻屋に身請されてからも、顔の一寸ちよつと似て居るのを幸い、弟ということにしてつれ込み、不義の契を重ねて居たが、矢張り吾妻屋永左衛門が邪魔になつて殺す気になつたのだ」

「へエ？ 恐しい女ですね」

「もつともあの月見の晩は、吾妻屋の方にも悪企みがあつた。最初果し合いに持出した徳利には、二本共南蛮物の毒薬を仕込み、大井久我之助は何方どつちを取つても、助からないように仕組んだのだ。そして大井久我之助がそれを呑む——という息の詰つまるような時分を狙つて、お酌に化けた米吉が、毒の入つてない徳利を持出し、それを主人の永左衛門が呑んで、目出度く大井久我之助だけを死なせる手筈だつたが——」

「——」

「物事はそう都合よくは行かない、お染と米吉は相談をして、主人の永左衛門が飲む筈の三本目の薬酒の入つた徳利に、石見銀山いわみぎんざん鼠捕りを投り込んだのだ。永左衛門はそれを飲んで死んだ。杏齋きょうさい先生が持つて行つた徳利二本の毒が違つて居るわけだよ、——そして、お酌のお袖が——たよりに化けた米吉が、徳利を持つて行つて又持つて帰つたと言つて居るのも本当だ、石見銀山の徳利を持つて行つて、南蛮物の毒酒を持つて戻つたのだ」

「ひどい事をしますね」

「ひどいのはそれからだ。それを嗅ぎつけて、お染へ執しつこく絡からみついた佐太郎を、虎松に誘い出させて打ち殺させ、——虎松がこれを根に持つて、乞食姿にも恥じずに、お染を口説き廻ると、油断をさせて置いて木戸の外へ送つて出た米吉に刺させたのだ」

「――」

八五郎も黙つてしまいました、あまりの事に、口をきく張合も無くなつたのです。

「何千人の男と掛り合つた女——の中には稀にこんなものもあるのだろうよ、怖いことだな、八」

「へッ、乞食と華魁の色模様なんざ、たまらねえな」

八五郎は平次の教訓より、この歪んだ情いろごと事の方が、遥かに面白そうです。

# 青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控 鬼の面」毎日新聞社

1999（平成11）年3月10日

初出：「サンデー毎日」毎日新聞社

1950（昭和25）年7月23日号～8月6日号

※初出時の表題は「銭形平次捕物控の内」です。

※誤植を疑った箇所を、初出の表記にそって、あらためました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2017年5月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 銭形平次捕物控

## 毒酒薬酒

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>